

医療通訳への入り口としてのお話しボランティア

-外国人入院患者のストレス緩和を目指して-

外国人入院患者さんのストレス緩和を目指した研究をはじめました。外国人患者さんのところに通訳ボランティア、医療ボランティアの 2 人でいきます。お話しをして外国人患者さんの入院によるストレスを和らげることを目指します。医療通訳の入り口としてのお話しボランティアの必要性についてのワークショップをも行いました。報告します。

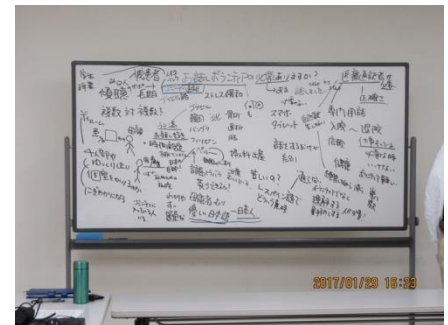
1. ワークショップ「医療通訳の入り口としてのお話しボランティアの必要性」を話し合いました。

日時:平成 29 年 1 月 29 日(日)14:00~16:30 場所:静岡パルシェ会議室

参加者:14 名。静岡市、焼津市に住む外国人、通訳者、医療者、外国人支援者、大学教員。

結果:お話しボランティアは医療通訳に繋がる(6 名)。お話しボランティア登録者 7 名。

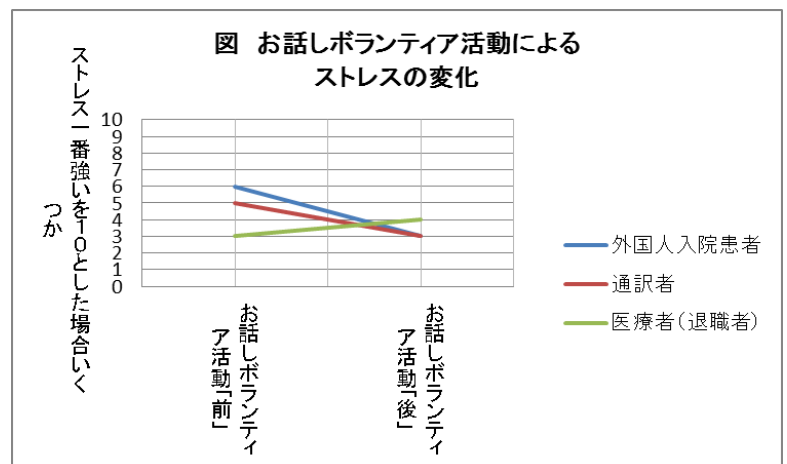
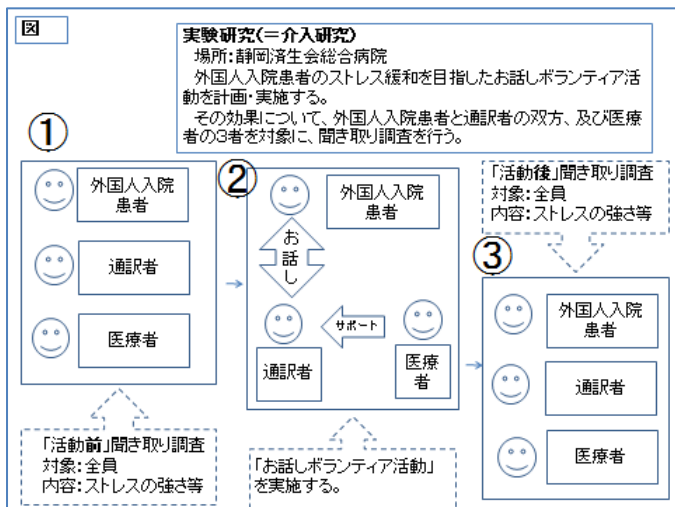
「医療通訳への入り口としてのお話しボランティアの必要性」の話し合い内容	
1. 外国人入院患者	1)外国人入院患者は話をしたい 2)多国籍、多言語、多様な価値観・人生観がある 3)様々な疾患や傷害をもつ
2. 医療通訳者	1)医療通訳者がいない 2)医療通訳者が必要である
3. お話しボランティア	1)コミュニティ通訳者はどうだろう 2)やさしい日本語を話す人はどうだろう 3)学生がお話しボランティアをするのはどうだろう 4)地域にいる通訳者はどうだろう
4. 医療者	1)患者を理解する人(看護師か)が必要 2)医師に、診断名等は英語で教えてほしい
5. お話しボランティア活動の場所	ベッドサイド? 食堂?



2. 介入研究「お話しボランティア活動」を行いました。

日時:平成 29 年 3 月 30 分程度 場所:静岡済生会総合病院

結果:外国人入院患者、通訳者のストレスは軽減しました。一方、医療者のストレスは増加しました。患者と通訳者のお話しが上手いっている間、何をしていたのか、困ったそうです。この研究時、ご家族の方、病院の医療者、皆さんの笑顔を見ることができました。研究を進めていきたいです。



研究代表者:前野真由美(看護学部・講師)

研究分担者:高畑幸(国際関係学部・准教授)、水野かほる(国際関係学部・准教授)、岩崎圭介(静岡済生会総合病院 地域医療センター 医療相談室長)、前野竜太郎(常葉大学 健康科学部・准教授)、濱井妙子(看護学部・講師)